

思ひのみこそしるべ

古今和歌集恋一の初めに近いあたりに、つぎの贈答歌がある。

右近の馬場むまばのひをりの日、むかひに立てたりける車のしたすだれより、女の顔のほのかに見えければ、よみてつかはしける

在原業平朝臣

見ずもあらず見もせぬ人の恋しくはあやなくけふやながめくらさん

返し

よみ人しらず

しるしらぬ何かあやなくわきていはん思ひのみこそしるべなりけれ

思ひのみこそしるべ

「右近の馬場のひをりの日」は、右近衛府に属する馬場で騎射の行われる晴れの日、五月六日のこと。「ひをり」は引折りで、近衛の舍人たちが晴衣の裾を折目正しく折る意という。「むかひに立てたりける車」は、馬場を隔てた向う側にとめてあった女車、「したすだれ」は、車の前後の簾の内側に垂らした薄絹の幕の意。下簾を透かしてほのかに見えた女の面影に魂をうばわれ

た業平が贈った歌は、まったく見ないというのでもない、またよく見たというのでもない人が恋しくて、わけもなく今日一日物思いに沈んでくらすのだろうか、の意であるが、裏に一同じくはたしかに見えしられ給はんかといふ心をふくめ（伊勢物語拾穂抄）ていることはいうまでもあるまい。それを受けとった女の返歌は、見知ったとか見知らないとか、どうしてわけもなく區別して言い得ましよう、恋路はただ人を思う思い、それだけがしるべになるのですよ、の意。これも、一步進めれば、「業平の思ふ心だにふかくは逢事のたよりとはなるべき心也」という『伊勢物語 肖聞抄』の解釈も可能となる。女の歌は、てきばきと割り切って、教訓的（？）ですらある。しかし、それは恋の本質を鋭く衝いているということが出来る。

業平の目に、女の顔が下簾を透かして見えたというのは、垣間見に似ているが、やはりちがうであろう。垣間見は、こちらの存在が相手に知られない状態で、その意味で優位に立って、相手の容姿・行動等のすべてを自由に見ることが出来るのをいう。ここで優位に立って、相手の胸の内を自由に見てとったのは、案外女の方かも知れない。それは、男の歌に「ながめ」とあるのに、男の胸に燃えそめた「思ひ」（語尾の「ひ」に「火」を掛ける修辞法が万葉以来用いられている）をはっきりみとめたうえで、逆にそれを迎える姿勢をとったところからいえる。

この贈答歌はそのまま、伊勢物語第九十九段に組み入れられて、一編の物語に構成されている。伊勢の地の文は古今集の詞書にほとんど同じであるが、ただ、「在原業平朝臣」を「中将なりけ

るをとこ」とし、末尾に「後は誰と知りにけり」という一句を加えて、この贈答歌に物語のシチュエーションを与えたところが異なる。「誰と知り」の「知り」は、単に相手の女の素性がわかったというばかりでなく、情交の体験を得たこと、言いかえれば恋の願望を果したことを意味し、それはまさしく、男の胸に燃えあがった「思ひ」が「しるべ」となって、女のもとに通っていった結果である。

「おもひ」の語についての懇切な解説が、『岩波古語辞典』に見えることはすでに書いた(「すける物思ひ」参照)。「思ひ」はここで情念と言いかえてもよい。その情念は本来盲目であるから、奈落に向かう危険な契機を内包するはずである。しかしそれが、「胸のうちに……じっとたくわえている意」を原義とする「思ひ」であるかぎり、「外に向って働く原動力を常に保っている」「心」とちがうところから、外部から強い規制が加えられれば、消極的な反応しか示さないかも知れない。それにもかかわらず、その「思ひ」が「火」と燃えあがるとき、自分はおろか、相手をも焼き亡ぼす業火となることがある。この女は、「しるしらぬ」を判別する人智のはからいを退け、その「思ひ」のみが恋路の「しるべ」となるという。ここには、「火」を闇夜の「道しるべ」とした、遠い祖先の知恵のおのずからな発明が、歌の世界に、掛詞としての「思ひ火」、縁語としての「火しるべ」の修辞法をもたらしたことを知るのである。

先年、沖繩の旅から帰った友人に、名護浦を染め出した暖簾を土産にもらった。藍色の湾を抱え込むように、低い山々が白く連なる上には、同じく藍色の空がひろがっている。その空の部分に、よく知られるつぎの琉歌が白く染め抜かれている。

浦々の深さ

名護浦のふかさ

なごのみやらびの

思いふかさ

沖繩の浦々、とりわけ名護浦の深さ、それにも負けない名護のみやらびの「思ひ」の深さを称えた民謡である。書齋の出入口に掛けわたして日夜親しんでいるうちに、いつしかその深い「思ひ」に感染してしまったようである。「思ひのみこそしるべ」と詠んだ王朝の女人の歌に心ひかれなもの、そのせいかも知れぬ。

(五五・四)